

# グローバル・スタディーズ研究センター 2013年度プロジェクト

---

2013-1

2013年6月4日（火）開催

第1回グローバル・スタディーズ研究センター院生合同セミナー

本センターは、平成25年度第1回グローバル・スタディーズ研究センター院生合同セミナーを下記の通り開催いたしました。

日時：6月4日（火）16:20～

場所：国際関係学部棟 3317 講義室

プログラム：

趣旨説明

研究発表1

発表者：クマール・ディーバク

タイトル：「ヒンドゥー教から仏教に改宗する人々—カーストの桎梏を解放する仏教」

コメンテーター：富沢寿勇

研究発表2

発表者：陳冬梅

タイトル：「内モンゴルの飲食文化に関する研究—内モンゴル東部における伝統的飲食文化の変容」

コメンテーター：奈倉京子

2013-2

2013年7月2日(火)開催

**第2回グローバル・スタディーズ研究センター院生合同セミナー**

本センターは、平成25年度第2回グローバル・スタディーズ研究センター院生合同セミナーを下記の通り開催いたしました。

日時：7月2日(火) 16:20～

場所：国際関係学部棟 3317 講義室

プログラム：

趣旨説明

研究発表1 (発表20分、質疑応答20分)

発表者：ジャンセン

タイトル：「インドネシアにおける災害と観光の関係ージョグジャカルタの火山・噴火の事例からー」

コメンテーター：富沢寿勇

研究発表2 (発表20分、質疑応答20分)

発表者：奈倉京子

タイトル：「『ネイティブ人類学』から考える大学院の留学生教育の課題と提案」

コメンテーター：林芳樹

2013-3

2013年10月30日(水)開催

**特別講演「ICTを活用したインクルーシブで持続的なインド農漁村の開発：スワミナサン研究財団の活動」**

ノーベル平和賞受賞団体であるパグウォッシュ会議会長を務めた M.S.Swaminathan 博士が設立したインドの持続的農業開発研究機関である「スワミナサン研究財団」は、スマトラ沖津波で多くの犠牲者を出した南インドにおける「障害者と高齢者を含むすべての住民の安全確保」を目指し、地域防災の日印共同研究を行うため来日しています。東北大震災被災地と、ユニークな地域防災活動を展開する「浦河べてるの家」を訪問し交流した同財団情報・教育・コミュニケーション部長代理の Anabel 博士に「最も遠くの農村こそインターネット等のネットワークを活用して知識の共有に参加すべき」と説く財団の活動と今後の日印の共同研究計画について講演していただきます。

講演題目：「ICTを活用したインクルーシブで持続的なインド農漁村の開発：スワミナサン研究財団の活動」

日時：平成25年10月30日(水) 10時40分から12時10分

場所：国際関係学部棟 3219

講義室実施担当：石川研究室

研究科、学部学生及び教職員の参加を歓迎します。

問い合わせ先：石川研究室国際関係学部等2階3205(内線)5325

2013-4

2013年12月5日(木)開催

### 特別講演会「イスラームと教育」

本センターは、2013年12月5日(木)に、中国のイスラーム系民族とタイのイスラームの人々の共通点と相違点について議論する特別講演会を開催いたしました。

講演会では、王建新氏、小河久志氏より、国家(政府)の宗教教育への介入の様子と、それにより日常生活の中でイスラームの役割や機能がどのように変容したのか、当事者のイスラーム信仰、ムスリムアイデンティティにどのような影響を与えたのか、ということについてご報告いただきました。両氏の報告はともに長年に渡る人類学的フィールドワークで得られたローカルな一次資料に基づくもので、説得力のある内容でした。

王建新氏は、新疆ウイグル自治区の東部に位置するトルファン盆地をめぐるウイグル族のイスラーム教育を考察対象とし、1949年の中華人民共和国成立前後でそれがどのように変容したかということについて、地域社会の背景、宗教指導者、イスラーム教育の制度、イスラーム教育施設の点から1949年前後の状況の比較を行い、報告をしてくださいました。

1949年以降、ウイグル族のイスラーム教育は、国家の教育制度からは排除されて民間で行われる教育となったと言います。加えて、政府行政管理の下で機能上の縮小が見られ、倫理道德の教育という性格が濃くなり始めたそうです。他方で、「風俗習慣」として存続させようとする動きもあり、これが場合によっては一定の政治・社会的役割を担うことがあるものの、それがすぐに反体制的あるいは全体的無神論イデオロギーと対抗することになるわけではないと述べられました。

小河久志氏は、タイにおけるイスラーム教育の発展の過程を、国家やイスラーム復興運動団体といったナショナルなレベルの外的諸力との関係から描き出すとともに、そのことがムスリムの社会・文化に与える影響の実態について報告してくださいました。

学校教育制度外のイスラーム教育に、「クルアーン塾」、「モスク宗教教室」、「ポーノ(pono)」があることに加え、学校教育制度内にも国公立小学校・中等学校でムスリムの生徒がいる学校ではイスラーム科目が開講され、国家の介入によりポーノが改編されてできた私立イスラーム学校も存在すると言います。これは、ポーノを深南部で続くマレー系ムスリムによる反政府武装運動の温床とする政府の認識からです。このようなイスラーム教育の多様化により、小河氏のフィールドの村では、各機関の関係者が相手機関の教育内容や教育方法の違いなどを理由に自身の属す宗教教育機関とそこで教えられる知識をイスラーム的に「正し

い」ものと主張し、対立する動きを引き起こしたと言います。このように、ムスリムが少数派のタイにあってイスラーム教育は、国家やイスラーム復興運動団体等のナショナルなレベルの外的諸力の関与が進むことで拡充しているということでした。ムスリムのイスラーム理解が進む一方、彼らが習得するイスラーム知識は多様化しているとまとめられました。

2つの報告を受けて、コメンテータ（本学国際関係学部 林芳樹、富沢寿勇）から、公教育と宗教教育との関わりや、ハラールの事例を取り挙げながら、国家がイスラーム的価値観や消費行動に関与していく状況等について意見が述べられました。加えて、受講生の講義後のコメントペーパーには、「日本と違い、多くの国では、宗教が国民のアイデンティティの根源であったり、教育の基礎であったりすると思う。複数の宗教をもつ国での宗教に対する統治は複雑で難しいと思った」、「少数派である以上、国からイレギュラーな存在と見なされてしまうのは仕方のないかもしれないが、だからといって、行政機関が正しい知識を持たずに、また住民の声を聞かずにイスラーム教育政策を改革するのはどうなのかと思った。ただ、ここまで独自の制度を発展させていると、政府が推進する既存の社会制度に組み込むためには多少の強引さを必要とするのも分かるから難しい」等の感想が寄せられました。（文責 奈倉京子）

本講演会では、ローカル、ナショナル、グローバルなレベルから、中国のイスラーム系民族とタイのイスラームの人々の共通点と相違点について、及び三者のレベルがどのように絡み合っているかということに触れながら、お二人の講師にお話しいただきます。ナショナルなレベルでいうと、中国は社会主義の社会、タイは民主化された社会という違いがあり、イスラームへの干渉の仕方とその理由が異なります。また宗教的マイノリティという立場は共通していますが、それぞれの社会での受け入れられ方も異なります。このような相違について、本講演会ではイスラームの教育の視座から議論していただきます。

日時：2013年12月5日（木）4限（14：40～16：10）

場所：2107室

共通テーマ「イスラームと教育」

プログラム

報告者 1 王建新（中国蘭州大学西北民族学院）「ウイグル族のイスラーム教育の行方：20世紀トルファン盆地の比較を中心に」

報告者 2 小河久志（大阪大学グローバルコラボレーションセンター）「イスラーム教育の発展と社会・文化的インパクト：タイの事例」

コメント 林芳樹

コメント・総評 富沢寿勇

問い合わせ先：奈倉京子（[nagura@u-shizuoka-ken.ac.jp](mailto:nagura@u-shizuoka-ken.ac.jp)）

2013-5

2014年1月23日(木)開催

### 講演会「移民の「帰還」、「故郷」をめぐる概念と生活世界」

本センター共催の講演会「移民の「帰還」、「故郷」をめぐる概念と生活世界」が平成26年1月23日(木)に開催され、帰還移民の比較民族誌的研究についての討論が行われました。

二世以降の移民が、戦争や植民地支配による(強制的)移動・帰還・排斥や、ユダヤ人やドイツ系移民のように、数百年後の民族的故地への帰還に直面した時、どのような問題が浮かび上がるのでしょうか。大川真由子さんより、その問題群が整理され、「帰還」と「故郷」の概念について説明がありました。そして「帰還=終点」あるいは過去の事象としてではなく、帰還を社会的に埋め込まれた過程として捉え、帰還後の生活世界により焦点を当てるべきだと主張されました。

つづく浅川晃弘さんは、1959年から実施された北朝鮮帰還事業について報告しました。この帰還事業は2つの疑問が残ると指摘します。1つは、なぜ在日朝鮮人の人々は、明らかに生活水準の低下する北朝鮮への移住を果たしたのか。もう1つは、当時の在日朝鮮人の約64%が日本生まれであり、加えて、9割以上が韓国に起源をもつことから、北朝鮮に戻ることは当事者にとって「故郷」への「帰還」だったのか、ということです。これらの疑問に対し、浅川さんは、在日朝鮮人を包摂するか排除するかという二項対立的な論理は、敗戦にともなって変化した「日本人」概念とも関わりがあることに注目しました。敗戦前、「日本人」は、「内地人」と「外地人」を含んでいましたが、敗戦後、「外地人」は外国人化されました。日本の法律では、血統を重んじるため、日本で生まれ、数世代を経た在日朝鮮人は「外国人」とみなされることになったのです。これが「排除」の原理、あるいは北朝鮮帰還の「自由選択」という考えへとつながっていったと述べられました。

最後に比留間洋一さんは、パネル調査を行ってきたベトナム難民一世のフィ氏の事例を通して、ベトナム難民の「故郷」であるベトナムとの関係性がどのように変化してきたのかということについて紹介しました。比留間さんとフィ氏の出会いは、1990年代初頭、比留間さんが大学時代にアルバイトをしていたベトナム料理店だったと言います。当時のフィ氏はベトナムに帰ることなど考えられないと語っていました。ところがその後、国際関係が変化するにつれて、JICAの通訳としてしばしばベトナムへ帰国するなど、頻繁にベトナムへ足を運ぶようになりました。このようなフィ氏の変化を比留間さんは「H2O」に例え、時に氷となり、時に水となり、気化する時もあると表現しました。

以上の「アジア、日本、戦争」で共通する報告について、高畑幸さんが「勘違い」をキーワードにコメントされました。「目的—合理性」の原理から外れるような移民の事例の背後にある原因—メディアの宣伝、情報が不十分、道具的な「故郷」の利用等—について興味深い分析をしてくださいました。学生からも「なぜ韓国出身の人が北朝鮮へ戻るのか？彼らにとって北と南の区別はなかったのか？」といった鋭い質疑が出され、議論が盛り上がりました。

数世代にわたって本国を離れていた人々（移民）が一度も足を踏み入れたことのない土地をどのような意味において「故郷」と捉えるのでしょうか。「故郷」とはその人個人の出身地であったり、その民族の先祖といわれている人の出身地であったりする必然性はありません。重要なのは故地との結びつきに対する記憶や信仰であり、ときにそれは戦略性を帯びることもあります。今回の講演会では、20世紀の（脱）植民地／帝国化といった歴史性にも配慮しつつ、「故郷」と「帰還」の両概念を批判的に検討することを通して、ある特定の土地に所属意識を見出すことができず、土地と所属意識の結びつきから抜け落ちる人の生活世界の創造や戦略といった問題群に切り込みます。

テーマ：移民の「帰還」、「故郷」をめぐる概念と生活世界

主催：国立民族学博物館共同研究（若手）：「帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界」

共催：静岡県立大学グローバルスタディーズセンター

日時：1月23日（木）午後2時40分～4時10分

会場：静岡県立大学一般教育棟1階 2107室

プログラム：

司会進行：奈倉京子（静岡県立大学）

報告者① 大川真由子（早稲田大学）：移民と「帰還」、「故郷」（14:45～15:00）

報告者② 浅川晃広（名古屋大学）：北朝鮮帰還事業と戦後日本人概念（15:00～15:20）

報告者③ 比留間洋一（静岡県立大学）：在日ベトナム難民の新しい物語—「二世」についての「故郷」（15:20～15:40）

報告者④ 山田香織（香川大学）：ドイツにおける二つの時代の「帰還」現象と故郷認識（15:40～16:00）

コメンテーター：高畑幸（静岡県立大学）（16:00～16:10）